

小津久足『難波日記』について・付翻刻（下）

菱岡， 憲司
有明工業高等専門学校

<https://doi.org/10.15017/1909553>

出版情報：文献探究. 55, pp.5-20, 2017-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



小津久足『難波日記』について・付翻刻（下）

菱岡憲司

廿一日。日よし。

ある人のもとをとぶらへるに、わりなく酒をしひられ、からうじて辞しかへりぬ。上戸のにくむべきは、おのれさけをこのむとはいはず、人にとはれてかならず「不調法」、又は「いさゝのむ」などおほめきて、酔たる時は「よはず」とのゝしり、赤心をあらはさざるものなれば、下戸の赤心に「のます」といふも、そのたぐひに聞なされて、をりくかゝるからきめにあふことあるは、下戸の難儀なり。目前に酒有ては、いかなる美着も、下戸のめにはつかぬを、主もあたら着をつひやし、かたぐくをかしからぬこと也。されどこれに似たるためし、よにはおほききもの也。こはうへをかざる世の悪風よりおこることにて、真率の人すくなければなるべし。

ついでにいふ。ちかきころは煎茶流行するが、おのが心のまゝによき茶をのませ、うまき菓子をくはするは、さるかたなれど、小川可進といふ人の門人となれる人どもは、あやしき式をなし、茶味をむつかしくいふに似げなく、茶は碗の底にいさゝかつぎいるゝのみにて、味も鮮ならず、ぬるくてこゝろあしきに、茶味をそこなふとて、菓子をもみだりにはくはさざるも、本意にたがへり。

この可進は、わがしる人のうちにも、師とし、たふとむ人あれば、はやく同席せしこともあなるに、野鄙文盲にて、礼儀にうとく、甚なめげなる人がらにて、同席をしばしするだに、けがらはしくおもふしれものにて、かりにもたふとむべき人ならざるに、いかにして門人となる人のあるにや、いぶかしきこと也。

この人ことし、とし六十二にて、丙午のとしうまれし人なるよし、けふしもふときゝたり。わがすむあたりにも、丙午出生の人これかれあなるが、おほかた心ざまおなじやうにゆがみて、おのが意つよく、ひたすらまけじとすまひて、人を人とおもはず、人のいふこと耳にいりがたく、わがいふことは非を理におしまげんとし、俗にいふ無法ものにならざるもの也。和漢ともに丙午のとしを悪年といひ、おなじとしにうまるゝをいとふこと、そのいはれなきにあらず。丙午生ときかば、その人にはとみに交をたつべきことなり。かの可進が人となりをかねていぶかしくおもへるに、丙午生ときゝて、その人のいとはしきも、げにとおもひなりぬ。

廿二日。日よし。

片山ながしの家にて稽古能あるを見にものす。おのれ能見ること
を好めれど、人にことなる癖ありて、番組に好悪あり。先はしづかな
るかたをこのむかたにて、けふの番組のうち、「弱法師」などは心に
かなへり。「松風」はめづらしからねど、猶心ひくかたなり。さはい
へど、われらが身にとりては、さわがしきものをこのむかた、ふさは
しかるべし。もとより商人の能をこのむは、よき衣のたぐひともいふ
べければ、ほこるべきことにあらず。角力・芝居・かるわざ・手づま
などいふものを、あなおもしろしいはんこそ、似つかはしかるべ
れ。

廿三日。日よし。

大坂のかたにゆかんとて、朝とくやどりをいづ。東福寺に入て、通
天橋の楓の青葉をみて、

かへるでの青葉の春をきてみればみどりの天に通ふ高はし

「山門のほとりなる池の水のに」これるは、山門の天井の画の天人が、
よべ水のめるなごりにて、をりくかゝることあり」と朝きよめする
をのがゆびさしをしゆるは、おもひもかけぬことどもにて、あやし
きことをもいふものかな、とおもはる。

稻荷御社にもまうで、伏見にいたり、ものなごくひ船にのる。夜船
ならねば、両岸のけしき、またくひまにうつりて、あかぬこちす。

山崎に船をとめて離宮八幡宮にまうづ。『三代実録』にみえたる
相応寺の古跡には柳あり。このところに橋ありて、柳おほかりしこと
『土佐日記』に見えたるも、おもひ出られて、

橋ありしむかしの春のおもかげをかけてぞしのぶ青柳の糸

やゝくだれば、「酒くらはんか、餅くらはんか」とて、ものうる小

船いで来れり。こはこのあたりのならはしにて、ものをうるにいとあ
やしくなめげなる詞はいかゞなるを、よのつねとなりては、とがむる
人もなきを、聞しらぬ田舎人は、いかりはらだつもあるよし。嗟来食
をくはざりしから人は、いかゞいふらんとをかし。

大坂にいたり、桜の宮あたりにて、

春たけしさくらの宮は若葉にてのころともなき花のおもかげ

花ちりしあとの青葉もたゞならぬ陰をさくらのみやはすつべき

天満天満宮にもまうでぬ。ちかきころの失火にあたりはやけながら、
御社はつゝがもまします、きらびやかにたゞせ給ふは、ことにたふ
とし。

かくて道頓堀に船はてゝ、淡路屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。

めうつしのかはる難波に船はてぬひるねのゆめかありし都は

廿四日。日よし。

このほど奈良に開帳あるよしかねて聞れば、日よきほどにゆかんと
て、朝とく大坂をたつ。

東小橋村といふにいたり、大小橋命御胞衣塚のほとりをすぎ、中道

村といふにいたれば、くらがり街道なり。本庄村といふをすぎ、今里
村といふにいたる。この村の妙法寺といふは、契沖阿闍梨の古跡とか
ねてきけれど、いそぎてえたちよらず。深江村といふにて、

春もやゝふか江のさとを過行ば菜の花ちりて麦はほにいづ

この村に法明寺といふ寺もあり。昔がさつくる家おほし。このむら
のかたへは足代村といひて、こゝははやく河内国渋川郡にて、摂津
国東生郡との国さかひなり。

高井田村といふにいたれば、これより若江郡也といふ。御厨村・

新家村・菱江村などいふをすぎて、松原村といふにいたり、ものな
どくふ。道頓堀より百廿五丁なり。

又新家村といふをすぎ、豊浦村といふにいたれば、枚岡神社にち
かし。こは、『式』に「枚岡神社四座〔河内郡〕」と見えて、ゆゑよし
もことなる御社なれど、はやくまうでしことあればまうでず。このあ
たりにては、もと春日といふもよりどころなきにあらず、をかしきこ
と也。

くらがり峠のゝぼり口には、髪切山にまうづるちまたありて、石標
たてり。峠をすぎては大和平群郡也。くだれば西畑村・藤尾村・
萩原村などいふあり。小瀬村といふにいたれば、小瀬川といふ川あ
りて、立田川の川上也といふ。又むろのき峠といふにのぼる。この山、
砂山にて、峰のさま松などをかしきあたり有。

けふはいとあつく、俗にまつむしといひて、蟬のごとき虫のこゑ
ぐゝ耳かしましきも、うるさきこゝちす。

峠には家居ありて、くだりはてたるところを追分村といひて、郡山
へゆくちまた有。砂茶屋といふにいたれば、松原より三里半也。

はりつけ村といふをすぎ、はりつけ山といふちひさき坂をこえ、宝
菜村といふを左に見、はた村といふをすぎ、宝菜山のほとりをすぐ。

こは、あたりの池いとひろく、中に島山のごときがあれば、かたちの
蓬がしまに似たるよりかくはいへど、まことは『式』に「菅原伏見東
陵〔纏向珠城宮御宇垂仁天皇在大和国添下郡〕」と見えたる陵にて、
はやくも拝せしことあり。陵おほかる中にも、この陵はことにいかめ
しく、あがられるよのまゝに、いさゝか山のさま池のさまなどかはら
ぬ陵とおぼし。この陵を武烈天皇の陵也といふさと人のつたへはいぶ
かしきこと也。

菅原天神といふもほどちかし。こは『式』に見えたる「菅原神社〔添
下郡〕」なるを、菅原といふより天満宮とあやまれる也。かゝるたぐ
ひ世におほし。

尼辻にいたれば砂茶屋より一里也。こゝの本陣、松本何がしとい
ふものゝ家にやどりぬ。

いまだ日くるゝにほどあれば、唐招提寺にまうでゝ、戒壇堂などに
のぼる。この寺の額は、孝謙天皇勅筆にて世に名だかければ、住僧に
こふに、「内々見せん」とて宝蔵をひらき、その中にもなひて見せ
たり。いとふるく殊勝なる額なるが、今の世のやうにかけず、たゞに
うちつけたるものとみえて針穴あるに、「額打論」といふ名目おもひ
あはされたり。『徒然草』に、うつといふはよからぬことのやうにい
へれど、今めのまへにこのさまをみては、その詞にもひたすらなづみ
がたし。何事もひろく見ずしては、さだむべからぬこと也。

外に七種の宝物といふもあれど、「そは容易にみせがたし」といふ
に、その七種を何々ぞときけば、おほかたは仏具也。「このほど宝蔵
よりとうでたる品をいまだをさめぬが、わが院中にあるを見せん」と
て、ともなひて手鑑をみせたり。こはきれものがちにて、さばかりめ
づらしきもみえず。董其昌が『天馬賦』といふ巻物、ことの外見事な
るもの也。かゝるあたりの僧は、おほかたはすげなく人をみくだして、
わが見識をはるものなるに、この僧は情ある人なるべし。

けふ奈良までゆかばゆるべきをこゝにやどれるは、奈良は開帳に
てやどりのらうがはしからんをいとひて也。

廿五日。日よし。

車新田村といふをすぎ、一里にて奈良にいたりて、猿沢池のほとり

にいづ。采女宮にて、

猿沢の池のたまものあとふりてのこる社も神さびにけり

案内者をやとひて、先開帳のかたをさきにす。こは時うつらば参詣人おほくなるべければ、しづかなる朝の間よかんなりとて也。

先、戒壇院の戒壇にのぼる。こゝもつねはみせざるところ也。壇の四方の四天王の像、鳥仏師の作といふが、今すこし後のよのものなるべくはおもはるれど、御面容たとしへなく、殊勝にみゆ。

それより勸進所といふにいたりて宝物をみるに、さまざまにてめでたきもあれど、目にとまるほどのものもすくなけれど、中に十字御額とて、「金光明四天王護国之寺」とある聖武天皇の勅額、きはことにみゆ。

公慶上人の像は、『畸人伝』にみえたる人なれば、よそならずおもはる。この上人のことにつきたる宝物おほく、そのしなども見れば、この上人はこの外なる大徳なり。中に、この上人が大仏殿勸進に諸国めぐられし時、周防国鯖川といふところの漁師が、施入せんにも銭なければ、「魚をとりてその価をせめても」と綱うちしに、おもはずも大仏殿の天平年中の古瓦を得たりしかば、これさいはひのものもと施入せしめ、上人「こは事なるべきしるし」とよろこびてうけられしその瓦も宝物のひとつとなれるそのつたへ、いと殊勝におほえければ、古瓦えたる鯖川さばかりのちぎりなくてはこともならじを

大仏殿にいたり登壇といふをなす。こは盧舎那仏のみまへにはしをかけたのぼらする也けり。正面ばかりたかく、めぐりは蓮華のほとりちかくめぐらするにて、その正面には拝所をまうけたれば、猶へだれり。その蓮花には、いとこまかにさまざまの仏像を多りつけたたり。御軀には梵字を多りたりといふ説かねてきければ、心とめてみれど、

しかとはみえがたけれど、この蓮華のさまをおもへば、梵字も多れるなるべし。

ひざのうへにのぼるおもへば三宝の奴にわれはあらぬ人かも

こたびは行基ぼさち千百年忌にて、この登壇あるよし。よにまれなことにて、はやくありしは六十年にもなれりといふ。かばかりのことなるに、いかゞなるは盧舎那仏のまへは一面に幕をはりて、御かたをかくせるは、登壇のしるとて銭をとれば、登壇せずしてすぐる人あらんかとなるべし。「開帳なりとて詣たるに、本尊の見えざるはいかに」とつぶやく人もあるはことわりに聞なざる。そのみならず、縁起とく僧は、おほかたやとひにて、さまざまのつくりごとひひて、俗人をよろこばせ、賽物とらんとするは、かたぐ心きたなきこと、おもはれて興さめぬ。さらでだに縁起はさきにするせるときものなるに、そのうへに附会をまじへたるは耳にさはれり。

この春、わがすむかたにて熊野那智山の観世音ぼさち開帳ありしが、縁起をみだりにとかざりしは心たかしといふべし。さばかりにおもはざりしも、ことにふれてかんじらるゝたぐひにて、今さらそのことおもひいで、げにとおもはる。

御まへの門をいづれば、見世ものてふものおほし。中にかの那智開帳にありし見世ものゝこゝに來たるがふたつみゆるには、故郷なつかしくおもはれて、おもはぬ旅の思をそへたり。

このほとり真言院といふにも開帳有。宝物の中に応永ころの布薩盥、あるは飯器など殊勝にみゆ。二月堂も開帳なるが、まことの本尊は秘仏にて、御前だちの開帳也。御かたいとちひさし。御厨子は四方正面とて、いづれもおなじやうにとばりをかけたたり。こゝも宝物おほし。手向山八幡宮にも宝物のをがませあり。こゝはおほかた樂器にて、

いづれもめでたく見ゆ。そのうちうつし鞍は、外にたぐひなきかたにて、こゝのみにあなるよし。いにし文化年中、南北の臨時祭御再興のをり、さゝげよとの勅命にてさゝげしことありといふ。則いま臨時祭にもちひらるゝうつしぐらは、このかたにてうつされたるなりとぞ。

時しあれば神のたからをうつしぐらむかしにかへるためしなりけり

綾蘭笠・古き唐櫃などもあり。こゝの宝物の中には、はやくものゝ中にてみしもなくならねば、めのまへにて真物をみることに、よろこばし。

さてところぐの宝物ことぐくするさまほしけれど、おのゝく宝物録あれば、それにゆづりて略しぬ。

三笠山のふもとをすぐるほど、ところから春のけしき、いとどのか也。

をりにあふ若草山の春の日にむつるゝ鹿のさまものどけし

このあたりにてはみちもさりあへぬまで人にゆきあへり。人のおほく出ぬさきにと、朝とくめぐりし心のうらはまさしかりけりと、ほこりか也。

御本社・若宮などにもまうで、氷室社にもまうでゝ、興福寺にまうづ。南大門ちかきに再興あるよしいふ。この寺の回祿は享保二年にて、同十一年のころ、一条院宮より御所望、法皇も勅慮をくはへられて、武者小路実陰卿が作進の勸化疏もあなるを、いたづらにおほくのとし月再興もなかりしを、時のいたれるものなるか、いよく再興あらば、薪の能のをりなどいかにえあらんとおもひやらる。

かくて猿沢の池のほとりなる釜屋何がしの家に入つものなどくふ。此家にはゝやくたびゝやどりしこと有て、主をはじめ、家内の人々、

みなしる人也。故郷をへだてたるところにしる人あるはうれしきものなるに、さきにやどりしは、はやく九年のむかしにて、主様子もおもかげかはれり。われはかはらじとおもへど、かなたよりは、われもおもがはりせりとみるべくやとをかし。

町のうち極楽院といふにも開帳有ときゝてまうづるに、ふるき寺なり。鎮守の天満宮もましませり。こはおのれ常にたふとみ奉る神なるに、けふは廿五日なれば、先みまへを拝し、さて宝物をみるに、智光の掌中の曼陀羅といふが第一の宝物也。その人の由縁ある宝物、礼光が由縁ある宝物もあり。智光・礼光ともに元興寺にすみよし、『元亨釈書』にみえて、その伝中に仏掌の浄土を画工にうつさせたるが、現に元興寺にあるよし見えたれば、こはそのまんだらなるべし。げにもふるく見えたり。

たなそこのうちつけにこそたふとけれ書にもこのころあとおもへば

元興寺の塔の試の塔といひてちひさきがあるも、いとふるくみゆ。この寺は、もと元興寺のうちにありしよし、ある書に見えたれば、むかしはこのあたりまで元興寺のうちなりけん。『元亨釈書』の二僧のつたへをおもひあはすれば、この試塔も後人の偽作にはあらざるべし。仏前のつりどうろうに応永の年号あるもをかし。

さて此寺は、呑海とかいふたはれたる僧をやとひて、ゑときさせたるは、ことにうるさし。智光・礼光の伝の絵まきものは、靈宝のうちにありて、近來のものともみえぬを、よるはこの俗僧がゑときして、人々むれつどふよしいふは、あさましきことにて、心くるしくおぼゆ。さきにいへる布薩盃、この寺の灯籠のみならず、宝物の外にふるくみやびたる台、又は卓めきたるもの、ところぐにてめにつきしが、き

のふ招提寺の宝蔵にもあるをみたり。これらは寺にてはさのみめでたきものともおもはざるべけれど、好事のくせあるひがものゝめには、宝物よりもめでたくぞおぼえたる。

ほどちかく元興寺にいたる。この寺の塔は修理のほどにて、屋根なる九輪を堂内に安置せるをみるに、おもひの外、大きなもの也。その外、いとふるき仏像もあり。この寺はたゞ塔ばかり古く、境内いとせばし。塔の大きなるをおもへば、さきにいへるごとく、極楽院もこの寺のうち成けんことうたがひなし。

かくて木辻をすぐるに、けふは俗にもん日といふ日なるよしにて、うかれ女どもがおほく見世にいでたるすがたの今めかしくあでやかなるは、旧都のあとゝしもいふ所にあはせては、似つかはしからずみゆ。

大安寺村をすぎ郡山にいたれば、奈良より五十丁也。小南村・イケンウチ池内村などいふをすぎて、小泉村コイズミにいたり、それより法隆寺にいたれば、郡山より二里といふ。

こゝのかせやなにがしといふものゝ家にやどりをさだめ、法隆寺にまうづ。このほどはこのあたりにもぎはしきなるべし。あひやどりする人おほく、さわがし。けふはあつかりしゆゑにやあらん、蚊さへむれつどひて、かたぐよるのめもあはず。

廿六日。日よし。

朝とくやどりをし、ほどなく立田にいたり明神にまうで、村をはなれて立田川をわたる。岸に楓おほく、青葉のさまいさぎよし。「ふるく歌によめる立田川は所たがへり」と識者はいへれど、俗にいふ多勢に無勢なれば、心のうちにそのけぢめをしらば、うへは俗説にしたがふかたよかるべし。

立田川かけたる波のぬれぎぬもほさでおくこそみやびなりけれ
東勢野村・西勢野村などいふをすぎて龍野タツノにいたる。「正一位龍田大明神」とある額かゝれる鳥居を入て、御本社にまうづ。こは『式』に見えたる「龍田坐天御柱国御柱神社二座〔平群郡〕」にて、東向に二座たゝせたまへるは、祝詞にもよくかなへり。

朝日かげたゞさす宮に千とせまでうごかぬ神の光をぞおもふ
悪風荒水なくまもるらん御夢のさとしよゝにつたへて

右のかた北向に二座たゝせ給へるは、『式』にみえたる「竜田比古竜田比女神社二座〔平群郡〕」なり。森のさま、御社のさま、立田なる御社にはこよなくかはりて大社なれど、こゝは往来の人すくなく、立田は往来おほきあたりなれば、立田の外にこの御社あることをしる人すくなし。このあたりにては、立田のかたをこゝの御旅所といひて、けぢめ明らかなるを、御旅所のかたは、なかゝに世に名だかきこと、くちをし。

法隆寺・立田にまうづる人は十三峠をこえ、達磨寺・当麻寺(当麻カ)どにゆく人は、いはや越をこえて、このみちはその間のすぢなれば、さきにいふごとく、ゆきゝすくなきなり。十三峠には、立田川のほとりにちまたありて、右にゆくがそのみちなるを、左に折てこゝにはきたるなり。こゝまで立田より五十丁といふ。

さて、此村を「たつの」としもいまはいへど、祝詞には「竜田」「立野」とあれば、「たちの」といふがよろしきかとおもへど、「たつた」をも「立田」としもかければ、そのたぐひにて、俗称もすてがたかるべきか。

この御社地に塔ありて、別当もちなるが、いさゝかあかぬこゝちす。
亀瀬村カメノセといふちかきほとりに横たはれる小川を立田川といひ、その

右のかたに三宝峰といふもあるは、後人の附会なるべし。

高山村といふに大和・河内の国堺あり。龜瀬峠といふをすぎ、すこしくだれば、雲石といふ石、川中にみゆ。こはいとひらめに大きな石にて、一面に雲のかたを多りつけたるやうなる石也。その石のたゞ中を水のながるゝを銚子口といひて、こゝをも大和・河内の国境といひて、むかひは猶大和国也とぞ。

葛井寺の觀世音、そのかみはこの石のうへにましくしが、洪水のをりながれて、今のところにはうつれるよし。さるからに詠歌に「紫の雲」といふことのある也といふは、まほにもうけがたしや。もとより此川は立田川の川下にて、堺の大和橋までかよふ船有。

青谷村といふむらのまへに、大坂と堺にわかるゝちまた有。はやくのをり、こゝより大坂のかたにたゞに行しこともありしが、こたびは左にわかれ、その青谷村をすぎて青谷の渡といふをわたる。

はたの麦つゝみの草も水の色もみな青谷のわたりなりけり
むかひに船つくほど、いさゝか雨ふりいづ。国分村にいたれば、

法隆寺より三里にちかし。こゝにいこふほど雨はれぬ。

片山村といふをすぐるほど、川のむかひ高井田村といふむらに木ぶかきもりみゆ。石川の渡といふをわたり、道明寺村にいたりて、世に名高き天満宮にまうづ。「正一位大政威徳天神」とある額は、宝鏡寺宮徳嚴尼公の御筆なり。天神の御像は、をりしも御開扉のほどにて、いとたふとくをがまれたまふ。はやくまうでしをりは、べちに開帳をねがひしに、かゝるをりにあひてふたゝび拝し奉ること、かたじけなし。謡曲にみえたる木槵子の木は今にあり。入口の池は龍吟池といふとぞ。

それより菅田八幡にもまうでゝ陵を拝す。いはでものことながら、

こは『式』に「恵我藻伏崗陵〔輕島明宮御宇応神天皇在河内国志紀郡〕」陵なり。こゝに龍泉寺の開帳有て、宝物ふるし。中に蘇我馬子像といふがあるは、なつかしからぬものながら、古代のものとみゆ。觀世音ぼさちの像のふるきもあり。

このむらよりちかく沢田村の陵も見えたり。こは『式』に「恵我長野西陵〔穴門豊浦宮御宇仲哀天皇在河内国志紀郡〕」とみえたる陵也。ほどなく藤井寺にいたれば、庭の藤の花いさゝかさかりすぎたるほどなり。

これも又すがりてやみん藤井寺かづらは御手の糸ならねどもこの寺の本尊開帳にて、座像の千手觀音なるが、よにことなるみかた也。宝物もふるきがみゆ。この寺の門の前の茶屋にてもなごくひ、村を出はなれ、『式』に見えたる「長野神社〔志紀郡〕」にまうづ。左のかたに『式』に見えたる「恵我長野北陵〔遠飛鳥宮御宇允恭天皇在河内国志紀郡〕」みゆ。このあたりは古き跡どもかくおほけれど、はやくめぐりしをりの日記にくはしくしたれば、こたびはくはしくしるさず。

岡村・小山村・津堂村・若林村・大堀村などいふをすぎ、川の堤を行ほど、左のかたにとほく陵のみゆるは、『式』に見えたる「丹比高鷲原陵〔泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇在河内国丹比郡〕」なるべし。川辺の渡といふは、このほど水すくなく、はしをわたる。川辺村といふをすぎ、ながら村といふにいたれば、石の鳥居たかく、並木ながくつゞける御社有。しみづ村といふをすぎ、平野にいたる。この村にも大きな石の鳥居たてる御社あり。

かくて河堀口のかたをこゝろぎす。道のほどながく、天王寺の塔は見えそめても猶とほし。この道のほどより百舌野二陵、左にとほくみ

ゆ。こは『式』に「百舌耳原北陵〔丹比柴籬宮御宇友正天皇在和泉国大島郡〕」「百舌耳原中陵〔難波高津宮御宇仁徳天皇在和泉国大島郡〕」と見えたる陵ども也。

こぼれ口にいたり、若松屋といふに入ていこふ。庭のかきつばた、さかりにていとうるはし。

天王寺にまうで、いまだ日くれぬほど道頓堀につきぬ。けふのみち国分より道明寺へ廿五丁、それより誉田へ五丁、それより藤井寺へ十四五丁、それより平野へ二里、それよりこぼれ口へ一里半余も有べし。

廿七日。日よし。

此ころ多田に開帳あるよしなれば、これも日よきほどにまうでんとて、朝とくいで、三番村・光立寺・新家村などいふをすぎ、十三村といふをすぎ、十三の渡をわたる。こほり村・今里村・三屋村などいふをすぎ、神崎の渡をわたり神崎にいたれば、大坂より二里也。遊女宮城の墓を見て、

法ならぬといひしことばの跡ふりてなにはのことも昔なりけり
小中島村・瓦宮村などいふをすぎ、食満村といふにいたれば、藤の棚あり。

人はみな立よりてゆけまつはる、藤のかづらのながき春日ぞ
清水村といふをすぎ、猪名寺村といふにいたれば、ゐなのさ、原といふが一むらあり。

さればとて心にとまるふしもなしさだかにあらぬあななさ、原かくて伊丹にいたるに、神崎より一里といへど、ほどとほし。
すこしゆきて辻村といふにいたれば、多田へ一里半とゑりたる石たてり。北村・久代村・加茂村・栄根村などいふをすぎ、池田にいたる。

伊丹より一里也。

入口の順礼橋といふをわたり、橋のつめなる、てしまやといふ茶屋に入て、ものなどくふ。この家の楼より呉織社ちかくみゆ。

さて、かの順礼橋をわたらず、つゝみにそひてゆくに、新道とてちかきころつくりなほせる多田道にて、そをたゞに行べきを、ものくはんがため、こゝにはよりたるなれば、又同じはしをわたり、川にそひてその新みちをのぼる。

出在家村・瀧山村などいふをすぎ、鼓が滝といふところあり。はしのほとりよりおなじ川つらにて、さばかりのながめもなきを、こゝは岩むら両岸にそばだちて、こよなきながめ也。そのいはむらにせかれて川巾のせばくなれるところをかくはいふにて、はやくよりはあしくなれりといへど、猶すてがたきを、こたび開帳にてかけ茶屋あまたあるは殺風景なり。

波のうつ音のみたかく聞ゆ也つゝみがたきの岸の岩むらや、ゆきてはしをわたり、川を左になし、すこし行て、池田より五十丁といふに多田にいたりて、多田院にまうづ。このほどこのあたり御停止にて、神像は開帳なけれど宝物はをがませたり。こゝはたゞならぬゆゑよしある寺なれば、宝物もさこそとおもひしを、さばかりめにとまるものもなし。ことしは八百五十年忌にて開扉のよし。神像をゝがまぬはのこりおほし。いづれも馬上甲冑の木像なりとぞ。

かくてもとのみちを川にそひてくだり、こたびは順礼橋のかみなる橋をわたり、池田の町をすぎて、尊鉢村・新家村・井口堂村・石橋村・刀根山村・新免村などいふをすぎ、岡村といふにいたれば、そのむらつゞき桜塚村といひて、大きな神の御社あり。福井村といふをすぎ、服部村といふにいたれば、天神の御社おはします。こは、

脚氣をいのるにしろしありとて、まうづる人おほし。

穂積村・長島村などいふをすぎ、みくにの渡といふをわたり、野中村といふをすぎ、十三の渡にてけさのみちに行あへり。

さて、「多田に行には、ゆくさのみちゝかし」といふあり。「かへさのみちゝかし」といふもあれば、みちをかへてこゝろみにゆきかひせしなりけり。すべて道法はそのところゝにて、畢竟は行なれたるかたを「ちかし」といふならひなれば、人口も信じがたく、実地をふみて後おもひしるものなるが、われはかへさのかたを、半道もちかくおもへり。ゆくさのみちは五十丁一里にて、いとゝほし。

廿八日。日よし。

廿九日。日よし。ひるすぎて雨をりくゝふりしかど、夕つかた晴たり。

三十日。日よし。

このほど、寺町の大蓮寺といふにて、京の泉涌寺のうちなる善能寺の観世音開帳あり。宝物はいとやんごとなきあたりの御品どもおほく、めざましくめでたし。御経巻などもあまたあり。中に無品内親王常子とまうし奉るがかゝせ給ふ経巻をこひてひらきみるに、女筆めかず男々しく、御手跡甚見事なり。こはいとめづらしきものにて、御筆のあとをいまだしらざれば、かくはこひたるにて、その外は御手跡かねてしり奉れる御方々の筆也。この常子とまうし奉るは、後水尾天皇の皇女にして、予楽院殿の御母君なれば、御手跡のすぐれ給へるも、いはれなきにあらざとまうし奉るべし。去年、弘化帝の御車をひきし牛を

も見せたり。従五位下丹波権守とふだをつけたり。

さて、本尊の縁起をとくは、談義僧と見えて、弁舌いとさはやかなり。京の諺に「だんぎぼはみずにはなす」といふは、「だんぎぼ」は小魚の名にて、「水にはなす」を「書をみずにはなす」といふにかけたる也。その諺のごとく、談義僧は文盲にて、弁にまかせ、口よりいづるまゝにみだりなることどもいふは、あたら本尊の名だてなり。さるを、老たる女が耳かたぶけがほなるもをかし。

この談義僧のみならず、今世の僧は、おほかた不学文盲にて知識がほすがおほし。これ学者とことなるところにして、学者は文盲にては人もしらず、人なみにすぐれたる力なくては学者といはれがたし。僧は力なくても人にたふとまるゝものから、さすがうしろめたければ、うへこそあれ、心はへりくだりて、世才をみがき、わが寺をとまし、人しらぬ醜事のたすけとせんがため、まよひをはらしてさるかたにみちびくにはあらで、世人の煩惱をまさし、中々にまよはずがつねなれど、まよはさるゝはおもしろく、さまさるゝはおもしろからぬ人情なれば、世人もしたしみ安きぞかし。学者は人に名をしらるゝばかりなりては、かならずその人に見識ありて、世人の意にそむくことおほく、われはとおもひゆるす心おごりに人をみくだして、へつらふことなれば、人にうとまれがちなり。まよはさんとする僧は、たゞ人の心にかはんことを心がけ、さまさんとする学者は、人の心にかなふことを心とせず。これ僧と学者のこよなきたがひなるうへ、僧はかたちをもて人にたふとまれ、学者はわざをもて人にたふとまるゝのわかちさへあり。僧には志操なければことひろく、学者は志操にひかれてことせばきことあり。されば、僧は勢あり、学者は勢なきも、そのいはれなきにあらざ。学者の講釈のやうに、この縁起をとけば、たれか賽物

をなげうつべき。されば、俗僧の倭弁にも仏威をまし、学者の見識に聖人の徳をそなふこともあるべし。是非はいかにともさだめがたしと、心のうちにおもひつゞけられて。

四月朔日。日よし。

津の国の難波の春の夢さめてあしのかりねに夏は来にけり
けふは船にて住吉にまうづ。長峽橋のもとに船はてぬ。長峽の名の橋にのこれるもをかし。御本社にまうでて、

あらはれしあはきが原のそのかみはいはであふがん言の葉の神
神宮寺にまうづ。こゝを「しんぐうじ」「こうくうじ」と俗にいふは、かたはらいたし。大海神社にもまうづ。こは『式』に「大海神社二座〔天津守氏人神住吉郡〕とみえたる神也。

もとのみちをかへり高灯籠にのぼる。この灯籠、はやくみしをりよりは、めでたくつくりかへたるは、中々に雅趣をうしなへり。大坂は福有の地なれば、かゝるためしおほし。

さて高灯籠のうへよりのぞめば、淡路島ひとめに見えてけしきよし。かの百舌野陵まぢかくみおろさるゝはかしこし。長峽橋のほとりちかく、芦ばかりしげりたるひろき江の見ゆるは、ちかきとしまで新田なりしが、神の御心になはざりけん、そをつくりし家、神罪をかうぶり、たえはてたるによつて、そのゝち田もかくなれるよしいふ。神田はべちにあなれば、かゝることはせずもあるべきに、罪かうぶりしはことわりにおぼゆ。

二日。日よし。

このほどは遊樂船いとおほし。きのふ住吉にても船のつけどころな

きほどにつどへりしが、よるはやどりの樓のまへの川すぢを、あるは
三味せんひき、太鼓うちなどさだめかしすぐる船かしまし。中には紅
の桃灯をともしつらねたるもあり。そのかげの水にうつれるは、あた
かも火のほのごとくうるはしくみゆ。

楽を極る船も水の上にもゆるほのほのあるをしらずや
といはゞ、仏めきたりとのそしりもあるべきか。

三日。日よし。

生玉御社にまうづ。『式』に見えたるのみならず、『日本書紀』など
にも見えたる御社なれば、いとたふとし。はやく詣しをりよりは、こ
との外きらびやかになれるは、こも大坂の福有によれるなるべし。

高津仁徳天皇御社にもまうづ。鳥居を入たるところの石橋を梅橋と
いふ。梅辻といふもちかきにあるよし。こは「さくや此花」のうたよ
りつくりまうけたる名なるべし。されど、「むかし高津といひしは、
べちのところにて、こゝは蝦蟇といひしあたりなり」といふも、かの
立田川を論ずるたぐひ成べし。

それより産湯稻荷にまうづ。こゝに古代神宝のをがませあり。その
宝物すべてふるく、ふるき神像あまたにて、古文書もおほし。中に名
だき鏡瓦などあり。こは絵図にては、はやく見しことあなるが、契
有て真物を見ることを得たり。こゝは比売許曾神社のいにしへの社地
也といひて、玉の井古跡といふもあり。比売許曾御社にもまうづ。こ
は『式』に「比売許曾神社〔車宮郡〕」とみえて、ゆゑよしもことな
る御社なり。ふるごとおもひ出られて、

新羅より小船にのりてわたりこし跡万代のひめこそのもり

それより餌指町なる円珠庵にいたりて、契沖阿闍梨の墓にまうづ。

このあざりの功は世にまたたぐひなきを、そのうち加茂真淵・本居宣長の両翁出て、そのいさをなかくばかくれたれど、われは両翁よりは、このあざりをこよなくたふとめば、はやくよりこのはかにもたびくまうでし也。そのゆゑは、両翁は英雄人をあざむくの説ありて、おしつけたることどもばかりにて、ふかくそのみなもとをきはむれば、うけがたきがおほし。このあざりのみは、おしつけたることなく、その説にもことごとく証拠たゞしく出所ありて、うけがたきことなし。このあざりの説のくはしきにするは仏者なり、との批判あるは、わが新説の奇をいひはらんとの妄言也。かゝる尊徳のあざりは、実によにまれなるべし。

冬こもる詞の花を難波津に春へと君がさかせけるかな

四日。日よし。

船にて天保山にゆく。阿智川あちがわの船のおほき、住よしにゆきしをり木津川口のさまといひ、げに輻輳の地也けり。

ずいけん山といふは、河村瑞賢といひし人、この川すちをほりし時、その土砂にてつくりし山なり。波よけ山といふが本名なれど、その名をいはず、ずいけん山とのみいへり。難波瑞龍寺を鉄眼とのみいふたぐひにて、まつたくその人に徳あるなるべし。

きづきける山よりたかく後の世にのこせる名こそうらやましけれ天保山にいたるに、はやく来し後、かの御趣意きびしかりしをりはすたれたるよしなりしが、ちかきころ又にぎはひそめたりとて、けふは日よければ、遊樂船とこそせきまでつどへり。

住吉は住よし、こゝはこゝにて、かくにぎはへること、げにも繁華の地也といふべし。ちかきころ出来たりとて高灯籠も見ゆ。山の絶頂

にのぼるに、松せのびて詠うたにさはり、はやくのをりのやうにはみはらしがたし。海辺はしほひたるほどにて、蛤蛸とる女兒どものはぎたかくあらはしたる、あたかも絵にかけるがごとし。この山はおほやけにては目印山といへど、天保年中にいできたりとて、俗にはてんぼ山とのみいふ。

いかゞしていかがみすてんほど、ほく海原はるゝ山のけしきを入船のまじるし山をきてみれば人むれつどふところなりけり

蛸とるなにはをとめが鶴はぎのさまなつかしくみゆるしりぶり

かへさは川筋かはりて、天満の天神の御旅など船のうちよりふしながむ。

五日。日ぐらし雨をりくゝふる。

ものへゆくみち新町をとほりて、さくらの青葉を見て、

青葉しもすさまじからずみゆる哉散ことしらぬ花のちまたは

このほど播磨国大山寺開帳なりとて、まうづる人あり。宝物録を見るに、おもひの外よき宝物もあるおもむきなれど、みちとほければえゆかざるは口をし。

こよひくれすぎて雨いみじくなる。

六日。日よし。

七日。日よし。

やどりの楼よりみれば、明日のまうけなりとて、家々の屋上に卯月花といふを竿のさきにたかくさゝげたり。かゝることするところもあまたなれど、わがすむあたりにはなきためしなれば、めづらしくみゆ。

神まつるそれにはあらで卯月花仏のためにさゝげたる見ゆ

このほど、信濃国善光寺開帳なるに、やよひ廿四日、大地震ゆりて、あたりの村々、家くづれ、参詣の人々死亡のさかずしらずと風のたよりに聞えて、大坂よりまうでし人々の生死のさかひしれがたく、まうでたる人々の家々はくつがへりさわぐよし聞ゆるは心ぐるし。いにし廿四日の夜は、尼が辻にやどりし夜也けり。亥の刻に地震ゆりたるよしなるを、おのれさばかりにおそれぬゆゑにや、うまいしてしらざりしを、つとめて聞たりしが、おそれずとも大地震ならば目さむべきを、いさゝかの事ゆゑめもさめざりし也。かの国のあたりは、いみじかりしなるべし。

八日。くもる。後小雨ふり、夜に入て雨いみじくなる。

九日。明がた、ことに雨いみじくふる。かねてより、けふは京にかへらんとてその用意せしを、「この雨はれての後」と宿の主はすゝむれど、川水もよべよりしてまされゝば、明日の天気もはかりがたければ、もし船のかよひぢたえなばと、いふせきにもかへがたくおもへば、しひて船にのる。苦ひまなくおほひて、昼船も夜船のごとく、よもはみえずいとつらし。暮ちかく伏見に船はてゝ、竹田街道をすぐるに、みちのほとりの溝川に、松の火として里人が小魚とるあり。

雨はれて猶宵月はくらき夜にゆくへをてらすいざり火のかげ

柳茶屋にいこふ。こゝにて本居翁が「こきませし桜のにしき」とよまれしは、さるべきうたにもあらず。この翁のうたの風は、さのみよろこばざれど、をりにふれては、ふとおもひ出られて、

こきませし昔といひし昔さへ今はこひしき青柳の陰

亥の刻ちかく三条にかへりつきぬ。又雨いみじくふりて、風さへはげし。川水の音、枕にひびきたれど、水音は故郷にてをりく聞なれば、耳にもさはらず。

十日。雨猶ふる。

よべことの外雨にて、川水のおとかしましく、ものいふことも聞えぬほどの水かさなるは、はやくよりおぼえぬこと也。されば四条のかりはしはやくたえたり。かくては淀川も水路たえぬべし。雨にしひてのりたる心のうらはまさしかりけりと又ほこりかなり。大津宿はほとりの小川、水あふれて家居そこねたるもあるよし、めづらしきことゝいふ。昼すぎて雨やみぬ。

安井にまうで、双林寺の長喜庵をとぶらふに、庭の青葉いさぎよく、をりからほとゝぎす鳴たり。

郭公としにまれなるわれとてやもてなしがほにこゑきこゆらむ
あめはるゝ谷の水音すみそひてものにまぎれぬほとゝぎすかな

知恩院にて、

春の色はうつりにけりなあさ緑わか葉さしそふ花のいたゞき
夕がた空はれて、こよひ月よし。

かも川やにごれる水にやどりても空にすゞしき夏のよの月

かの信濃の地震のこと耳かしましきまでさまぐの風説ありて、主は死、供のみからくにげかへりて、かのかたのたより聞えたるもありといふ。これによりてつくくおもふに、善光寺はかの地にては私に仏都としもなへて、仏者は最上のところといふめり。さるからに、信者はみちのとほきをもいとはず、まうづることなるに、かゝるあやしきめにあへるは、ことわりにたがへり。仏にこびたる人はいはせな

ば、わがゝたにたよりよくいひなして、さがりがたき因縁としもいふべけれど、因縁でふことは、ことわりの外なることのある時の仏者のゝがれ詞にて、うべなひがたし。されど仏都といふは、やがて仏の浄土なれば、そこにて身まかりなば、来世はかならずよきところとうまるともいひなすべけれど、現世の横死の汚名をいかにしてかそゝぐべき。横死すともよきところにむまれなば幸といはゞ、邪宗門の法にちかゝるべし。よの常、口かしこくいふ仏者の鼻も、こたびはひしげぬべしと、かたはらいたし。

一説には、「善光寺あたりの旅籠屋、こたび開帳につきて、ことの外、宿料をむさぼりたるによりて、その仏罰にてかゝることありし也」といへど、さてはむさぼられたる旅人は、何の罰によりておなじ難にあへるにや、ことわりに猶あはず。「御堂にこまれる人ばかりつゝがなかりしは、たふとし」といへど、旅居にやどれるも同じ参詣人なるに、そをすくはざるは仏に私あるに似て、人をすくふにはあらず、わが家のそこねんことをゝしむに似たり。

こたびの事につきても、天地のこの一己の僻見もてはかりがたきをしりて、口かしこくはいふまじきこと也。一理をもて万物はおさるとも、一事をもて万事はおしがたとおもふべし。しかしながら、仏者のさしもしみじくいふ善光寺如来の靈驗も不思議も、こたびあらはし給はぬは、諺に「正法にふしぎなし」といふごとくにて、なかゝく善光寺如来の善光寺如来たるところともいふべきか。

十一日。日よし。

きのふ夕つかたは加茂川の水もやゝおちて、ものいふこともまぎれぬまで水音もひくゝなれるに、いかゞしけん、よべ寅の刻すぎに、三

条の仮橋おちたり。よべよりしてその修覆^⑤の人多く、いとさわがし。

ひるすぐるほどより豊岡大蔵卿殿の御もとをとぶらひ奉る。綾小路宰相殿は御縁家にて、おなじ君の書き給へる更衣葵のたにぞくを給へり。御手跡見事なるをほめ奉れば、「こは有栖川宮の御門人にて、いまだ入木道の御伝授はすまねど、諷誦願文までは御伝授すみたる人なり」とかたり給ふ。さまゝの御ものがたり承りて、ゆふつかたかへりぬるに、はやく三条のかりはし修覆^⑥とゝのひて、ゆきゝあり。いはずとものことながら、かゝることのすみやかにとゝのふは、田舎にはみかざることゝも也。

十二日。くもる。夜に入て雨ふる。

十三日。雨ふる。

けふは竹内に能あるを見にもす。けふの番組のうち「絵馬」は、伊勢の国にてははゞかりてつとめざる能なればめづらし。「弱法師」「道成寺」「邯鄲」などもおもしろし。「船弁慶」はわがこのまざる能也。狂言はこのまざれば、その間は待遠にて眠をもよほしぬ。こはわれたはれたることをいみきらへばなり。

さて、けふはこの外のにぎはひなるをいかにといふに、片山なにがしが「道成寺」をはじめつとむるをみんとて也。さきの片山なにがしは上手なりしが、今のはとしわか、芸もさばかり上手ならぬを、かくつどふは、観世流、京におほければ、そのゆかりある人々は、わざをたふとまず師をたふとみて、わざの巧拙にかゝづらはぬは、一向宗の親鸞、法華宗の日蓮をのみたふとむたぐひと、かたはらいたし。この宗旨どもの祖師のみをたふとみて、仏のことはたふとまざるたぐ

ひは、今の世の学者のうへにもすくなからず。これその道をおしひろむる人にあざむかれたる眼さめがたく、まよへるによるもの也。

かくつどへる人々の中には、能のおもしろきをしらざるも、しりがほするが都人のくせにして、あるは酒食をたづさへ、茶函を用意して茶たつるもあるは、うるさくみゆ。都人の食物に心きたなきは、いつもいふことながら悪風也。田舎人は「都人は薄情なり」とておそるゝがつねにて、いかにも薄情にはあれど、すべて人の交はあなどると信ずるとのふたつより害を生ずるがよの常なれば、そのふたつになづまざる時は、おそるゝにたらず。はた今世は、いづこもくゝなべて薄情なるならひなれば、都人のみわきていふべくはあらず。

わが都人をきらふところはことなり。けふのごとく、能の意味しらずに酒食にいぎなはれてつどひ、茶席にいれば茶人がほをしなから、みづから家に釜をかくるにもあらず。書画器財などをみては、鑑定の力なくして、みだりに批判をなしながら、おのれは金銀をなげうちてもとむるほどの執心もなく、花紅葉のをりは、いちはやく遊行しながら、発句一文字つくることあたはず。書画かく人に交を結びて好事がほしながら、おのがものとしてかゝするほどの風流もなく、何ごとの席に出ても口かしこげに、たがへるこのみいひて、傍人のかたはらいたくおもふをもちへりみず。人のもとをとぶらひては、むねといふべきことをいはず、先ずごごごをながくいひつゞくるは、『つれく草』に「よの人あひあふ時、しばらくも黙止することなし」といましめたるによくあたりて、その事の甚しき也。俗人かとおもへば俗人ならず、雅人かとおもへば俗人にて、無益の人おほき也けり。されば、ひろき都にも、さすが都人もけりとおもふ人はいとまれなり。

さはいへど、土地は何となくおだやかにて、風流に富たることは、

江戸・大坂もおよびがたし。金銀おほきは大坂人、心すみやかにたのもしく、要をとりて無益のことすくなきは江戸なるべし。又、京の他にまされるは、すべての調度・文房・表具・きぬおりものなど、かぞへつくすべからず。蒸菓子・野菜の類もすぐれたり。たゞ塩魚を珍重するは田舎におとれり。野菜のたぐひにてもなさばざるかたなるを、かならず塩魚を調じいだせるはかたはらいたし。

さて、こたびは家よりして女ふたりをともしぬ。都にては日々そこかしこにもなひ、わが知己のもととぶらふ日は、案内者たのみて見めぐらさせたり。「大坂に来りては、芝居いとおもしろく、京にまされり。京はおほかた寺ばかりにて、ことなるところもなく、嵐山の中にはおもしろくおぼえしも、芝居には猶およばず」といふにつきて、つくくとおもふに、心すねたるひがものこそあれ、大かたの人は京より大坂をよしといへば、かくいふもことわりなきにあらず。芝居はおもしろからず、京の山川よしといはゞ、中々にかたわにこそあるべけれ。

おのれも芝居をこのまざるにあらねど、さすが老のさかひにいたりては、わかき時みしまにくらぶれば、役者もこよなくおとれるのみならず、今世は多どりとなへて、狂言のすぢをところくつくりかへ、外の狂言をもとりまじへて、木に竹つぎたらんやうなること流行して、ひとすぢにつゞきがたし。たとへていはず、初心の歌にても作者の心をたゞさず、みだりに筆をくはふる時は、本意をうしなふことあるものなるを、まして昔の名ある人の作を今のゑせ作者どもがなほせるは、ふつゝかなる事おほく、見るにたへがたくおぼゆるまでなり。猶たとへていはず、都の名ある医師は古人の法をそのまゝもちひて加減をなさず、田舎の庸医どもがみだりに加減して人命をそこなふたぐ

ひなるべし。豆芝居とて、子どもばかりのをもみしが、こはさすがに大坂なるものにて、としくくらべてはその藝の秀たる、「梅檀は二葉より」ともいふべく、目にとまりしが、人形芝居をも見たり。

ある三弦引の話に、「大序は一日の大意なれば、つゝしみてかたるべきものにて、大夫は膝の上に手をおき、三弦引はかけごゑをせず、『おなじ』といふ節にてはじめてかけごゑをなすが故実にて、一部のうちに『おなじ』といふ節たゞひとゝころなるがその証なり」といへりしが、そのわかちはあらざりき。これそのみちのみだりがはしくなるものか、猶そのみちの識者に尋ぬべし。

これらは益なきことなれど、何のみちも聞たゞしふかくきはめんとするがわがくせ也。さはいへど、役者・浄るりがたり・三弦引のたぐひは、おのが身の病をもかへり見ず、身命をなげうちておのが業に力をつくすことは、かんにたへたり。されば、かみにいへるいかゞの事はありても、見ればおもしろく、きけばおもしろし。

力持といふものをも見しが、これらも身命をなげうたずしてはなしがたきわざにて、いとみるめもあやふかりき。これはた、その業に力をつくすなるべし。今世の農商どもがわが業をわすれがちなるにはこよなくたがへることゞも也。

かくいふは、士は心こそたゞしからね、つとむべきおのがつとめは日々にかくことなし。工は難ずるかぎりにあらず。農商のふたつは、家とむにしたがひておのが業をわすれ、鋤鋤斤にかへて刀を手にとるなど、にくむべきの甚しきものにて、その身いやしきかのものどもにも、なかくにおよばざるをあざける也。

ふと筆うごきて常におもふことをものによそへていへるも、かたはらいたしや。

けふゆふつかたより空晴、天気よくなる。

十四日。日よし。けふは京をたつに、かく日よきは幸也。

ほどなく大津にいたるに、すぎし九日の風雨にてそこねたる家居ども見ゆ。こは街道のうらのかた也。石場にいたりものなどくひ、矢橋船にのる。この渡をおそるゝ人あれど、日枝山にいさゝか雲のかゝれる時こそあれ、よく晴たる時はなにのさはりもなく、陸を行ては半日のつひえとなれば、のるべきこと也。

ほどなく草津宿をすぎ、梅木村をすぎすこしゆけば、せんだの木立場といふがありて、名もしるく、せんだの木のおほきなるがありて花ざかり也。こゝのみならず、近江路のならひ、門にせんだの木ある家多し。昔の獄屋には、かゝるためしもありときゝしを、あやしきならひなり。

梅木をすぎての後のあふち陰げにもほひのかぎりなりけり

こはふと二十四番花信風のことをおもひよせたるなるが、ものしりめかさんとする浅学のほど、なかくにあらはなるべし。

石部宿にいたるに、こよひは土州侯やどりなるに、二条大番などさしつどひ、宿のうち旅籠屋ならぬ家までもやどりとなり、やどるべき家一軒もなきを、ゆくさにやどりし大黒屋なにがし、そこかしこたづねありきて、蛭子屋何がしといふものゝ家の別荘をかりてやどしぬ。しづかにて、なかくにこゝろよし。草津にかへるも本意ならず、水口まではほどゝほきを、かくやすらにやどるは、大黒屋なにがしがなさけにて、はた蛭子屋といふ名のとりあひたるをかし。

十五日。いさゝか空くもりたれど、日よし。

あけがたやどりをし、辰の刻ばかり暈あり。

朝日のみなどかゝさきる菅がさはとりもいだし空はくもるに
水口宿をすぎて、大野にてものなどくふ。このあたり枇杷はいまだ
青きを、都にてはやく熟せるをおほくうりたり。蛸もいまだすくな
きよしふに、大坂にてはおほくうるをみたり。繁華地と田舎のたが
ひ、おもふにたへたり。

土山宿にいたり、池屋何がしの家によりて、例の茶をもとむ。こは
「明ぼの」といひて、いかなることにか、いさゝか塩気ある茶也。さ
れば、六月の土用すぐれば葉の色かはり、風味もそこねがちなれど、
新茶のほどは風味よき茶也。

田村明神をふしをがみ、田村川をわたるに、こゝに領地のことしる
せる榜示ありて、「蟹河坂村」としるせり。去年このこといぶかしく
おもへりしが、この榜示にもかくしるせるをおもへば、かくのごとく
かくが本名なるべし。村名はすべて領主にてもちゆる字をとるべきこ
と也。

山中といふあたりをすぐるほど、鶯の鳴に、

うぐひすは猶ふりはてぬすゝか山ながなくこゑに春をのこして

坂下宿ちかきあたりに、河鹿をとりてうるがあるをみてもとむ。か
くて関宿、鶴屋何がしの家にやどる。

こよひ月よし。蚊帳を出せれど、旅中いまだつらさ。いぶせきがう
るさくてつらざりしが、夜なかばかり蚊いでゝなやめり。

十六日。けさもくもれゝど、日よし。

「亀山宿に失火あり」とてさわげり。明がたちかくやどりをし、関
川をわたるほど、郭公の鳴たるに、

かげくもるあかつきかたの山端に二声三声なくほととぎす

故郷もちかくなれるをかへるにはしかじとうたてすゝめがほなる
明はなれてひばりのなくは、天気よからんとうれし。

楠原宿・椋本宿・久保田宿をすぎ、部田ちかくなるほど、ゆくさに
みし菜花あとなくなれるを見て、

菜花はこてふの夢かおもかげものこらぬ麦の秋風ぞふく

菜花の春はうつりし麦の秋に日かずかさねし旅をしぞおもふ

このあたりは九日の夜の雨風ことにはげしかりしよしにて、みちす
がら木のをれたるなどもみゆ。やはたあたりの芝居小屋はなごりなく
ゝづれたり。

ひるすぐるほどより、天気よくなりしかば、足もことさらすゝみが
ちなり。旅なれたるわれながら、猶故郷ちかくなれるがうれしきは、
をさなきものとやいはん。されど、家にかへり、日ごろきかざる世の
まじらひのうるさきをきゝ、つかれをもやすめあへず、家づとくばら
んことなどをおもへば、先うるさきこゝちすめり。

かくて申の刻すぐるほど、家にはかへりぬ。

弘化四年といふとしのうづき

小津久足

本稿を成すにあたり、慶應義塾大学文学部古文書室には貴重な書籍の閲覧・翻
刻許可を賜った。ここに記して、感謝の意を表します。また、本稿はJSPS科
研費「小津久足の文事」15K16692による研究成果の一部である。

(ひしおか けんじ・有明工業高等専門学校)